

星^{ほし}になつたサマイエクル

むかしむかし、サマイエクルというカムイがいました。サマイエクルは、村から村へとめぐり歩き、人間たちに、魚の取り方や木の実の食べ方、木の皮で布を織る方法からカムイのまつり方など、さまざまなことを教えてくれたよいカムイです。そのサマイエクルが、話してくれたお話です。

風によって、なんともいい香りが漂ってきた。

これは、醸したばかりの酒の香りだ。

とても遠くから漂ってくる、ほんのかすかな香りだったので、

気づいたのは、わたしと、山のカムイである熊だけだった。

熊は、山のふもとをのつしと歩いていたが、

香りに気づくと、顔をあげ、風上へといちもくきんに走っていった。

わたしは、わたしの犬といっしょに、熊が踏んだ草の跡をたどり、

空を飛ぶような勢いで、熊を追いかけた。

それでも、まだ追いつけない。

すると、風が吹いてきて、わたしたちを空に舞いあげてくれた。

わたしと犬とは風に乗り、さらに山の奥へと追いかけていった。



たどりついた山奥には、大きな大きな家があった。

なかから、なにか物音がする。

のぞいてみると、宝物でぎつしりだ。

そのなかに、人がはいれそうな大きなシントコがあり、

そこから、酒のいい香りが、あたりいつぱいに漂っている。

そのシントコを、両腕で抱えこむようにして、

熊がごくぐくと、酒を飲んでいるではないか。

こんなにも人里離れた山奥にある、

これほどの宝物に埋もれた家は、

きつと魔物のすみかに違いない。

ああ、あの酒は、毒の酒だ。

教えてやろうと思つたが、熊はわたしを見向きもしない。

とうとうシントコを逆さにして、最後の一滴まで飲みおえた。

顔をあげた熊の目つきときたら、もうふつうではなかつた。

おそろしい吠え声をあげ、熊は外へと飛びだしていった。

わたしの犬が、狂つたように吠えながら、

その後を、いちもくさんに追いかけていった。



わたしがやつと追いつくと、なんということだ、熊は、その大きな拳を犬にたたきつけ、そのするどい爪で、犬の体をいつきに引き裂いた。

ああ、わたしのかわいい犬に、なんということをしてくれたのだ。たとえおまえが山のカムイでも、とても許せたものではない。

おまえは、どうしてそんな悪い心をもったのだ。

わたしは怒りのあまり、熊に襲いかかった。すると、熊もぐわつと立ちあがり、わたしに襲いかかってくる。

くんずほぐれつ戦ったが、

熊の一撃で、わたしはすうつと気が遠くなってしまった。

眠っているのか、死んでしまったのか、

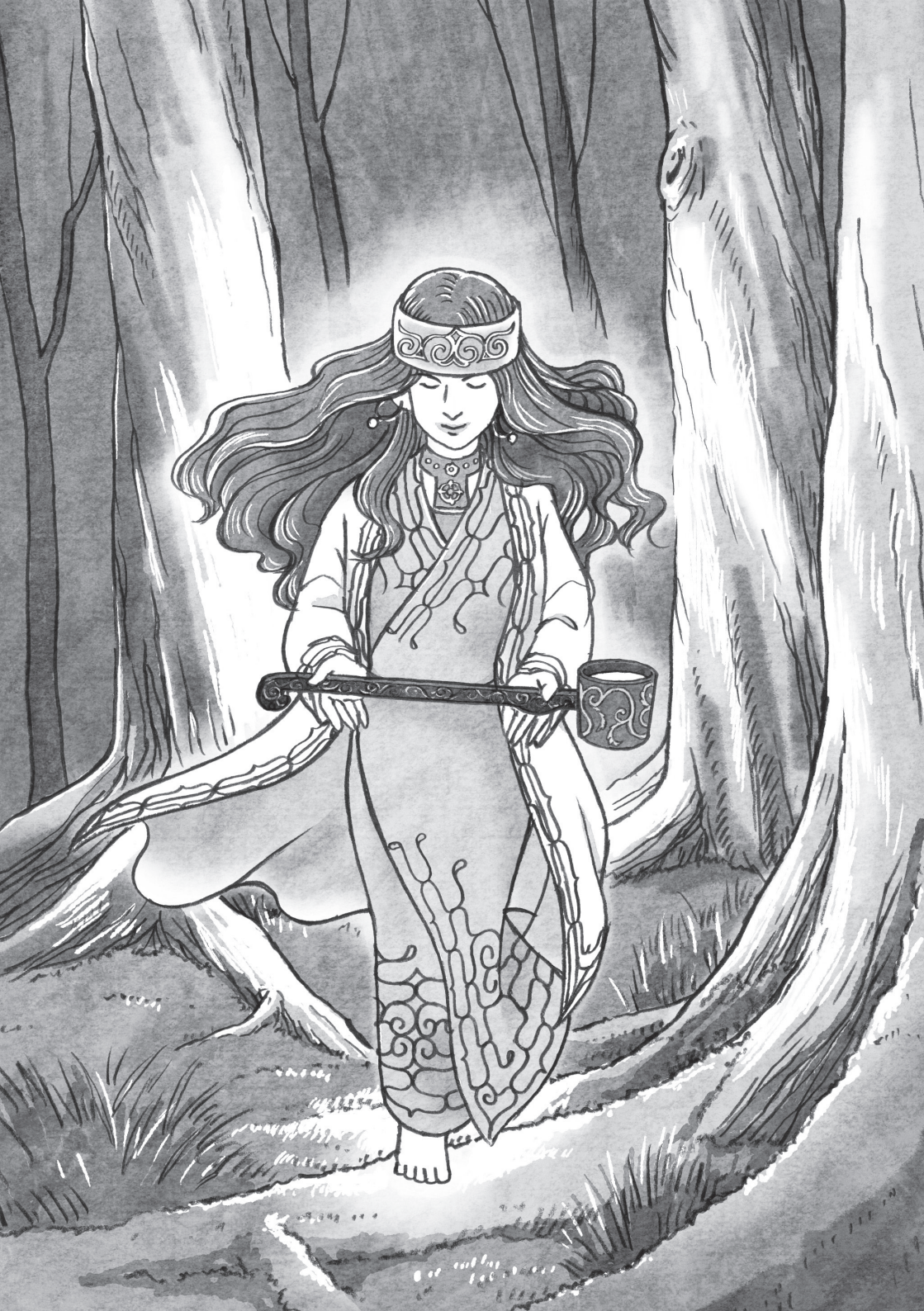
わからないままに横たわっていると、

どこからか、うら若い乙女がやってきた。

乙女は光のようにわたしに寄りそい、「ぎあ、これを」と、水をのませてくれる。

その水のおいしいこと！

体から光が溢れてくるようで、わたしはすつくと起きあがったのだ。



起きると乙女は消えていて、わたしはまた、熊を追いかけた。

草の踏み跡を追って、ようやく追いつくと、

熊は、大きな柏の木のそばを歩き過ぎるところだった。

ほんとうにりっぱな柏なのに、熊はいさつひとつしない。

よほど根性が悪いのだろう。

急いではいても、わたしは大地のカムイである柏の木をていねいに拝んだ。

それからまた熊を追いかけた。

すると、どうだろう。あつというまに追いついたのだ。

さあ、いよいよだ、目にも見せてくれる、

と思つたとたん、熊は口から、なにか取りだした。

見れば、オヒヨウの小枝だ。

それをすつと土にさすと、オヒヨウはみるみる伸びだした。

ぐんぐん育つて、見ているまに太い幹になり、枝を四方に張りめぐらせた。

それでもまだ、ぐんぐん大きくなつていく。

梢はもう、雲にも届かんばかりだ。

熊のやつ、いつたいどこから、そんなものを持つてきたのか。

あの、魔物の家だろうか。



わたしはしばらく、あつげにとられて木を見ていたが、はつと正気にもどり、熊に近づいていった。

わたしに気づいた熊は、あわてて木に登りだした。

その早いこと、早いこと。

わたしも、いそいで、追いかけた。

登っているそのあいだにも、木は伸びて、梢はとつくに雲のなかだ。

熊はもう、その雲のなかへとはいっていく。

わたしも、追いかけて、雲へとはいる。

あたり一面まつ白で、熊の姿もなにも見えない。

ともかくも、手探りで上へ上へと登っていくと、

あたりがいきなり、ぱつと明るくなった。

頭の上には、まつ青な空、とうとう雲を突き抜けたのだ。

見れば、かなたの枝の上に、あの熊がいるではないか。

わたしは呼びかけた。

「熊よ、熊、おまえはいつたい、どういふつもりで悪さをするのだ。

悪いとわかつて、やっているのか。

おまえが悪い心で、人間たちの国を荒らす気ならば、

わたしはおまえを、殺さなければならぬのだ」

熊は振りむいて、憎々しげにこういった。

「どこまでも追いかけてきて、うるさいやつだ。

どうだ、つかまえられるものなら、つかまえてみる。

おれが、おまえをたたきのめしてやる」

そこでわたしは、両手を広げ、

まるで鷲が獲物を狙うように、すばやく熊を追いかけた。

ところが熊は、枝から枝へと飛びうつり、

二つの空、三つの空を駆けぬけるように逃げてゆく。

追いかけても、追いかけても、捕まらない。

六日六晩、雷のような音を立てて争ったあげく、

わたしは、とうとう、あの性悪の熊を、

天空の果てに取り逃がしてしまったのだ。

なんと悔しいことだろう。

いつかきつと、つかまえてやる。

そんなわけで、わたしサマイエクルは星となり、
いまも空をめぐっているのだ。



和名で「北斗七星」と呼ばれているのは、この星々のことです。